

おぼまこと さん



町田市に住んでいたことのある絵本作家 おぼまこと さんの本を紹介します。
文学館や図書館で閲覧・貸出できます。ぜひ手に取ってみてください。

作家紹介



絵本作家。台湾生まれ。中央大学卒業。地方公務員、民間会社勤務を経て渡米。帰国後、独学で絵本を描き始め、1983年に初めてハンガリー「日本人6人展」に出品した。細かな描線が特徴で、インクや水彩、鉛筆等に加え、ボールペンや蛍光ペンなども画材として用い、人間や動物、草花を生き生きと描いている。1989年に『しばいっこ』で中央福祉審議会特別推薦賞、1999年に『世界一すてきなお父さん』で第13回赤い鳥文学賞さしえ賞を受賞。2003年に発表した『ひでちゃんとよばないで』は、ブラティスラヴァ世界絵本原画展に選出された。町田市には1990年から約15年間居住した。

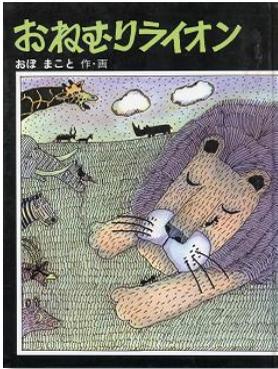


作品介绍



自作絵本

文も絵もおぼさんの作です



『おねむりライオン』(佼成出版社、1977年)

食いしん坊で乱暴者のライオンが、小さな赤い粒を食べたとたん死んだようにねむり始め、人間に捕まってしまう。ぐうぐう高いびきでねむったままサーカス、動物園と渡り歩いた末、結局草原に戻って来ます。心配した動物たちが相談をして、目を覚まさせる役目に決まったのは……。

ふだんはいかめしい顔つきをしているライオンが、すやすや気持ち良さそうにねむる姿がとても愛らしく描かれています。

『モンスター・ムシューとめんどり』(絵本館、1981年)

モンスター・ムシューは、とびきりおいしい卵をたくさん産むめんどりをさらって来ましたが、ある日一つも産めなくなってしまう。モンスター・ムシューがめんどりを食べてしまおうとしたとき、助けたのは……。絵だけの見開きページや、逆に文字だけが書かれたページが効果的に用いられ、物語の世界に引き込まれます。



『ごめんねムン』(小峰書店、1982年)

すすむは小学校1年生の頃、日本から遠く離れた南の島で、犬のムンと楽しい毎日を過ごしていました。しかし、戦争が終わったため、ムンを置いて日本に帰らなくてはなりません。

おぼさんの幼少時の体験がもとになっていて、当時の時代背景もにじみ出ている作品です。彼らの間に通う愛情と、離れ離れになることへの悲痛な思いが伝わってきます。



『王さまのやくそく』(絵本館、1982年)

うろこが不思議な色に光った魚を飼い出した王さまのところに、隣の強国が攻めてきます。困り果てた王さまは、戦いに勝ってみせるから、成功したら王さまにしてほしいという魚の提案を受け入れます。魚の不思議な力によって戦いには勝利しますが、王さまは急に地位を捨てるのが惜しくなってしまいます。

魚の持つ不思議な力が、見開き6ページにわたって絵だけで表現される場面は圧巻です。

『しばいっこ』(あかね書房、1989年)

おしばいをしながら日本中を回っているうめすけに、だいすけという友だちができました。おしばいの当日、うめすけは張り切りすぎて熱を出してしまいますが、だいすけに見てもらいたいという思いから舞台に出ることを決意します。

「しばいっこ」の意地を見せたうめすけのりりしい目つきと、町を去ってもまた会うことができると信じて、手を振りながら別れる最後の場面が印象的です。中央福祉審議会特別推薦賞受賞作品。



『サンタさんのうちへいけるかな』(福音館書店、1990年)

クリスマスの前の晩、プレゼントがもらえるか心配しているけんくん。サンタさんのところに連れて行ってくれるというねこのトムと一緒に、かいぶつの国やおかしの国、のりものの国などを通してサンタさんのうちへ向かいます。

読者も一緒に、それぞれの国の迷路を解きながら進んでいく楽しみがあります。



『ひとりぼっちのモンスター』

(ベネッセコーポレーション、1997年)

モンスター・ムッシュは、友だちがほしくて森にでかけますが、動物たちにこわがられて近づけません。それでも歩いていくと、けがをしたことりがいたので家に連れて帰ります。まるでお母さんのように優しく丁寧に手当てをした甲斐あって、ことりは元気になってうちへ帰っていきました。またひとりぼっちになってしまったモンスター・ムッシュですが……。

『モンスター・ムッシュとめんどり』に登場するモンスターですが、本作では心優しく寂しがり屋のキャラクターに描かれています。

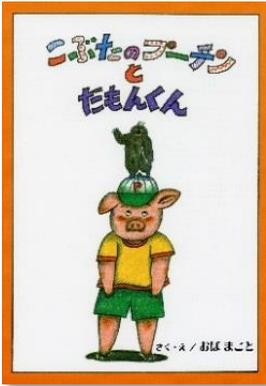


『ひでちゃんとよばないで』(小峰書店、2003年)

戦争中、台湾の小さな町に住んでいた小学校1年生のすすむは、近所に住むひでちゃんと仲良くなりました。お父さんが台湾人のひでちゃんは、敗戦を境にして「ホアン・ショウラン」という名前の台湾人になり、日本人のすすむとは会ってくれなくなりました。そして、日本人は母国へ帰らなくてはならなくなって……。

ひでちゃんの服装の変化からも、すすむとの間にできてしまった距離感が示されています。作中には『ごめんね、ムン』のムンも登場しますが、本作もおぼさんの体験がもとになっています。おぼさんはひでちゃんやムンとの別れについて、「私にとって一番最初の、人生での深い悲しみ」とあとがきで語っています。





『こぶたのプーチンとだもんくん』(中央出版、2005年)

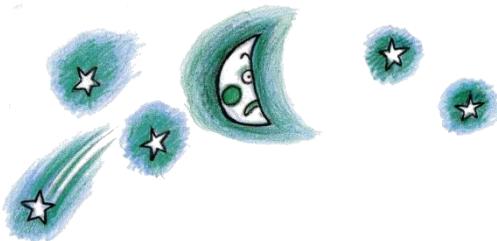
こぶたのプーチンは、お母さんの言うことをよくきいて、友だちとも仲良くできるとてもいい子。でも、小さくて黒い毛むくじゃらの「だもん」くんと友だちになってから、なぜか「いやだもん」ということばが、口をついて出てしまうようになります。プーチンが「いやだもん」「きらいだもん」と言うたびに、だもんくんの体は大きくなっていって……。

プーチンが気づかないうちにだもんくんの体が大きくなっていく様子に、読者はハラハラさせられます。

『さよならはいわない』(PHP 研究所、2009年)

ゆうたは、急に会いたくなると電話をくれたおじいちゃんに、一人で会いに行きます。二人で夕ご飯を食べた後、お祭りに行ったり、おばあちゃんとの思い出話を聞いたり、ひょっとこおどりをしたりして楽しく過ごしました。帰り際、おじいちゃんは「かたみ」と言って箱をくれて……。

後にかけてえのない時間を共にできたことが、おじいちゃんが亡くなった後の「さよならはいわない」という気持ちにつながっています。





なんとう さし絵を担当したもの



※紙芝居、全 16 場面

ペロー／原作 ・ 上地ちづ子／脚本

『ながぐつをはいたねこ』(童心社、1993 年)

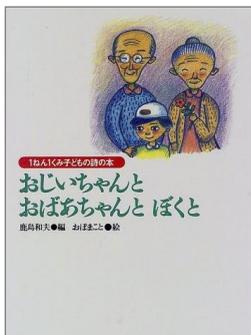
ヨーロッパに伝わる民話。粉屋の三番目の息子が遺産としてもらったたった一匹のねこは、自分にながぐつを作ってくればきっと幸せにすると約束します。ながぐつをはいたねこは、王様とお姫様の散歩道を先回りして、粉屋の息子を“カラバ公爵”に仕立て上げていきます。

次々と機転を利かせるねこの表情が、とても生き生きと描かれています。

前川康男／作『世界一すてきなお父さん』(小峰書店、1998 年)

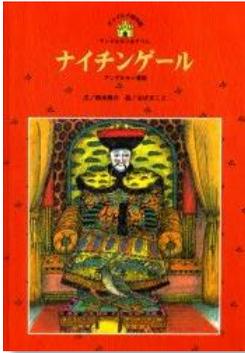
やさしくて、毎日遊んでくれて、スポーツマンでゲームもうまくて、動物も好きでお母さんとも仲良しの三郎くんのお父さん。それだけではなく、もっともってすてきなことがあるのですが、それは……。

最後に放たれる三郎くんの言葉に、読者も挿絵に描かれた「ぼく」と同じように驚愕の表情になること間違いありません。表題作を含め、4 編が収録された短編集。第 13 回赤い鳥文学賞さしえ賞受賞作品。



鹿島和夫／編『おじいちゃんとおばあちゃんとぼくと』
(理論社、1998 年)

小学校の先生だった編者が受け持った子どもたちが、「あのね帳」に毎日書いた詩をまとめたシリーズ。この本は、「ぼくのおじいちゃん」「どうして?」「こまったな!」の 3 章立てになっています。身近なことを、大人がハッとするような斬新な視点で書いた詩に、おぼさんの挿絵が優しく寄り添っています。



西本鶏介／文『ナイチンゲール』

(チャイルド本社、2002年)

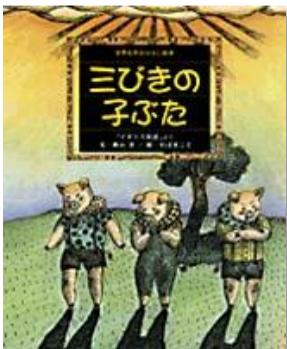
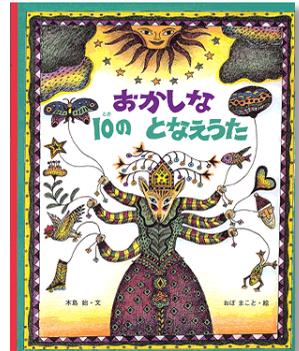
アンデルセン童話の一篇。昔、中国の皇帝の御殿は世界一立派なもので、その庭を歩いた先にある森には、特別きれいな歌声の一羽のナイチンゲールが住んでいました。家来がそのナイチンゲールを連れてきて歌わせると、皇帝はその優しく美しい声に涙します。ナイチンゲールは御殿で暮らすことになりますが、ある日宝石がちりばめられた作り物のナイチンゲールが届けられて……。

服装や背景など、細かなところまで中国の独特なデザインが描かれていて、他のおぼさんの作品とは少し違った魅力のある一冊です。

木島始／文『おかしな10のとなえうた』

(ベネッセコーポレーション、2003年)

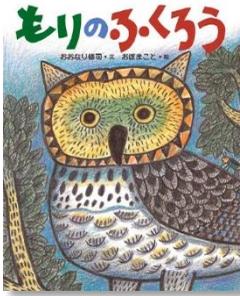
ことば遊びの本。「とかげと かげとが／かけくらべ／かげが とかげを／かけぬけて／がっくり とかげが／けがしたら／かげくん とかげに／くっついた」といったように、音とリズムが重視された文章なので、その情景を絵にすると、とてもシュールで、不思議な世界に迷い込んだような感覚になります。



森山京／文『三びきの子ぶた』(小学館、2006年)

ジョゼフ・ジェイコブスの『イギリス民話集』に収められた有名な民話。わら、木、れんがでそれぞれ家を造った子ぶたの兄弟。二人の兄はおそろしいおおかみに食べられてしまいますが、三番目の子ぶたは知恵をしぼって対抗します。

前半はリズムカルな繰り返しの文章に合わせて、挿絵の構図もパターン化されていますが、後半になって物語が進むにつれて変化していきます。



おおなり修司／文『もりのふくろう』(絵本館、2014年)

静かな夜、リスやヘビ、イノシシなど森の動物たちがねむりにつきます。ふくろうも目を閉じてねむっているのかな、と思いきや……。

すやすやねむる動物たちの安らかな寝顔と、子どものふくろうや森のみんなを見守るためにぱっちり目を開けたふくろうの顔が対照的に描かれています。

アマンジ・シャクリー／文・野坂悦子／文
『カワと7にんのむすこたち』(福音館書店、2015年)

鍛冶屋のカワは、7人の息子たちと力を合わせて働いていました。あるとき、両肩からヘビが生えてしまった国王・パシャが、そのヘビに食べさせるために毎日男の子を2人ずつさらっていくようになります。カワは村人たちと話し合っ、男の子を山奥へ逃がすことしますが……。

クルド人(イラン、イラク、トルコ、シリアにまたがる地域に住む少数民族)の言い伝えをもとにした絵本です。悪魔の青白い不気味な顔色と、カワたち村人の生き生きと紅潮した顔の対比が鮮やかです。



読んでみたい本があったときや、
ここにのっていない おぼさんの本について知りたいときには、
文学館や図書館のカウンターにお声がけください。

発行 町田市民文学館 ことばらんど 2015年7月

